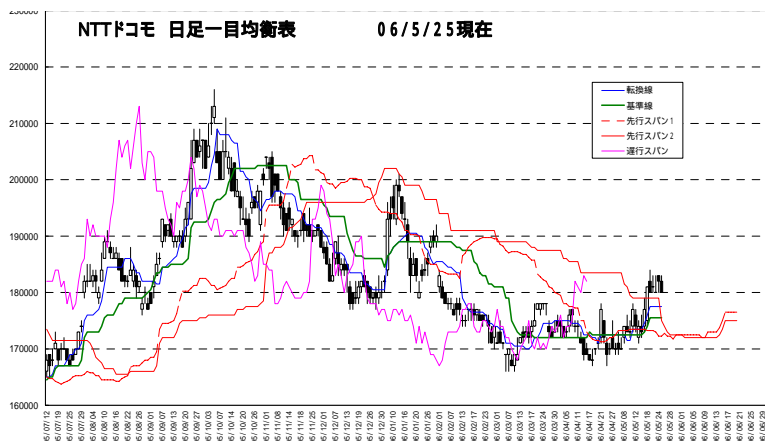


## 参考銘柄1

## NTT ドコモ (9437 東証1部)



【国内最大の携帯電話キャリア】

5/25 株価 180,000 円(1株単位)

連結 PER	17.2 倍
連結 PBR	1.97 倍
連結 ROE	12.0%
発行済株式数	48,700 千株
配当利回り	2.22%
年初来高低	166,000-201,000 円
売買高 10 日移動平均	233,265 株

## ポイント1 日本最大の携帯電話キャリア、「FOMA」を積極展開

日本最大の携帯電話キャリアに君臨するNTTドコモ。通信業界のガリバーであるNTTグループ内においてグループ収益の大半を稼ぎ出している(営業利益ベースではグループ全体の70%に達する)。先日発表された2006年3月期の決算では、売上高が4兆7658億円(-1%)、経常利益は9523億円(-26%)、当期利益は6104億円(-18%)と振るわなかったが、経常利益の絶対水準はトヨタ自動車の2兆873億円、NTTの1兆3058億円に続いてわが国第3位に位置づける。また売上高経常利益率は20%近い水準を維持しており、依然として国内有数の高収益企業であることには変わらない。すでに国内では携帯電話の加入者数が9000万件を超えており(2006年4月末現在で9227万件)、人口から見れば飽和状態にほぼ近づいている。そのうちの5139万件がNTTドコモグループで占めている。第2位はKDDIグループ(「au」とツーカーの合計)で2365万件、第3位がボーダフォンの1522万件である。NTTドコモは国内シェアの55.7%を占めている。昨年度の国内の携帯電話出荷台数は前年比+6.4%の4692万台になり、2年ぶりに年度合計で増加した。携帯キャリア各社が第3世代携帯電話(3G)のサービスを拡充したため、3G機種の出荷比率が全体の78.6%を占めるようになったことが大きい。

通信可能エリアの整備が遅れていた「FOMA」の基地局が整備されつつあり、加えて端末機の低価格化によって最近ではNTTドコモの巻き返しが目立っている。2006年4月単月での携帯電話の加入者数では、新規契約数から解約数を引いた純増数でNTTドコモが5カ月連続で国内トップになった。4月からスタートした地上デジタル放送のワンセグ対応機種に積極的に対応した点も好調維持の要因として挙げられる。ただしKDDIもブランド別に見れば、「au」だけで単月の純増数が+35万3600件と、ドコモの+25万3800件を大きく上回っている。現在KDDIは「ツーカー」から「au」への移行を進めているため、ツーカー分の-13万9900件がトータルで響いている。

## ポイント2 3.5世代携帯で「au」を猛追する体制整う

ここ数年、携帯電話業界の話題はKDDIの推進する「au」の躍進で持ちきりだった。「au」は通信方式として米クアルコムが提唱する3G規格「CDMA方式」を採用。中継局や基地局の設置で第2世代からの移行がスムーズに行え、ドコモの提唱していた3G規格「W-CDMA方式」と真っ向からぶつかり合った。しかしドコモの「FOMA」が通信可能地域の拡大に手間取っている間に、「au」は高速通信の機能をフルに生かした「着うた」や「着うたフル」の新サービスを次々に投

この資料はファーストメイク・リミテッドが会員のみ発行するものです。当資料に記載されている数字・意見等は、当社がその正確性を保証するものではありません。また、投資に関する最終判断はご自身で行われますよう、お願い申し上げます。加えて、当資料の著作権はファーストメイク・リミテッドに帰属し、いかなる方法によっても、全部もしくは一部を無断で複製・転用・配布・転送することを禁じます。

## NTT ドコモ (9437 東証 1 部)

入。若者の圧倒的な支持を背景にドコモの牙城を切り崩していった。今や「au」の契約者数全体に占める 3G 比率は、この 3 月期末で 96%、2182 万台にも達している。さらにより高速化した 3.5 世代携帯「WIN」の比率もすでに 36% にのぼり、以前は 70% 近いシェアを保持していたドコモを大きく引き離れた。

この点はドコモ側も十分に認識している。今年 10 月から始まるナンバーポータビリティ制度の導入を控えて、3G 機種種の拡充が最優先と判断した模様。決算発表を終えた 5 月初旬に、今年度末の FOMA の契約数を前年度末比で 1.5 倍の 3500 万台にする計画を打ち出した。そのためには 3G 分野に 6400 億円の設備投資を断行し、基地局数を現在の 5 割増にあたる 4 万 4000 カ所に増強。これによってドコモの全契約数に占める 3G 比率を現在の 45% から 66% に引き上げる考えを示した。増強計画が進めば現在の FOMA の通話エリアは今年夏までには、第 2 世代のムーバを上回って基地局の整備はほぼ完成することになる。あわせてドコモは GW 明けに、通信速度が FOMA の 10 倍にあたる 3.5 世代携帯電話の概要を発表。今年の夏モデルとして発表した 10 機種の中のひとつで、NEC の「N902iX」。FOMA を上回る高速・大容量データ通信が可能になり、動画や音楽のダウンロードが以前よりも簡単にできる。夏モデルの「902iS」シリーズは特に音楽機能の充実を目指しており、音楽番組をダウンロードできる新サービス「ミュージックチャンネル」のサービス開始も同時に発表した。楽曲を 1 曲まるごとダウンロードできる KDDI の「着うたフル」をターゲットに置いていることは明らかで、音楽配信サービスで「au」を追撃する構え。

### ポイント3 「おサイフケータイ」は NTT ドコモの独壇場

ドコモにあって「au」にないのが「おサイフケータイ」の機能である。おサイフケータイとは、ドコモの携帯電話にソニーが開発した非接触 IC カード技術「フェリカ」チップを使って、電子マネー「Edy(エディ)」を搭載した決済機能付き携帯電話である。財布に入れていた小銭程度の支払いやクレジットカードの機能をひとつにまとめて、携帯電話として持ち歩くことができる。決済機能だけでなく、携帯電話の画面からいつでも口座残高や支払い履歴がわかり、また携帯電話の画面からチャージ(入金)することもできる。場所や時間を選ばずにいつでもどこでも入金、支払い、チケットのダウンロードなどができるといふもの。「おサイフケータイ」の機能が最も利用されているのが、今年 1 月から始まった JR 東日本との共同作戦、「おサイフケータイ」に JR 東日本の「Suica(スイカ)」を搭載した「モバイル Suica」である。JR 東日本も NTT ドコモも電子マネー規格にソニーのフェリカを使っていたことから実現した。JR 東日本の定期券や乗車券はもちろん、駅構内のキヨスクでの支払いなどにも利用できる。1 月からサービスを開始して、1 年後には利用者 100 万人を目指しているが、今年後半には、「モバイル Suica」内にチャージした電子マネーを利用してネットショッピングができるようなサービスも導入する予定である。また来年には新幹線の指定券を購入できる「チケットレス」サービスの実現も目指している。

まだ始まったばかりのサービスだが、電子マネーとともに「おサイフケータイ」の潜在的な市場規模には関係各社が熱いまなざしを送っている。5 月 26 日からは NTT ドコモと三井住友 FG が、カードと携帯電話の決済機能の両方が使えるクレジットサービス「DCMX」の入会受付を開始した。「DCMX」はカードでの利用と同時に「おサイフケータイ」でも決済できるクレジット機能。利用限度額は 20 万円以上で、分割払いやキャッシングなど通常のクレジットカードと同じ使い方ができる。年会費は無料で、ドコモショップでも「VISA」、「マスターカード」ブランドのクレジットカードを発行する。またこの 6 月よりフジテレビと共同で、地上デジタル放送「ワンセグ」と「おサイフケータイ」を連動させた新サービスの検証実験を開始する。携帯電話に組み込んだ IC カードとデータ放送を組み合わせると、たとえばフジテレビの深夜番組を携帯電話で視聴すると、その受信端末にデータ放送経路でポイントが送られて、一定ポイントをためると i モードで懸賞に応募できる。当選者にはメールが届き、メールの指示に従って携帯を操作すれば、フジテレビの番組関連イベントに参加できるようになる。イベント会場での個人認証にも使えるという。通信と放送を融合した新しい展開では、携帯電話の決済機能が大きくクローズアップされてくる。この点で「au」やボーダフォンはドコモにはまったく歯が立たない。NTT ドコモの新たな躍進が期待されるところである。

この資料はファーストメイク・リミテッドが会員のみ発行するものです。当資料に記載されている数字・意見等は、当社がその正確性を保証するものではありません。また、投資に関する最終判断はご自身で行われますよう、お願い申し上げます。加えて、当資料の著作権はファーストメイク・リミテッドに帰属し、いかなる方法によっても、全部もしくは一部を無断で複製・転用・配布・転送することを禁じます。

## NTT ドコモ (9437 東証 1 部)

## ポイント4 テクニカル: 中長期波動で底入れ確認

IT バブルの前夜である 1998 年暮れに上場して、IT バブルの頂点で上場来高値 91 万 4000 円(権利調整後)まで駆け上った。その後は競争激化から株価は下落の一途をたどり、いまだに上場来安値付近に低迷している。しかし中期波動で見れば、昨年 4 月の 15 万 9000 円と今年 3 月の 16 万 6000 円で株価は 2 点底を打っており、ようやく底値を確認した形。ごく短期でも同様に、今年 3 月と 4 月に 16 万 6000 ~ 7000 円で底入れしており、今後は緩やかな上昇基調に向かうと見られる。当面は昨年 10 月の高値 21 万 6000 円奪回を狙うが、それを抜ければ週足同幅上げで 25 万円までの上昇も見込める。

業績(連結・億円・前期比%)

	売上高		経常利益		純利益		EPS
	金額	前期比%	金額	前期比%	金額	前期比%	
2005/3	48446	-4.0	12882	17.0	7475	15.0	15,771
2006/3	47658	-1.0	9523	-26.0	6104	-18.0	13,491
2007/3 予	48380	1.0	8150	-14.0	4880	-20.0	10,425

(四季報より)

この資料はファーストメイク・リミテッドが会員のみ発行するものです。当資料に記載されている数字・意見等は、当社がその正確性を保証するものではありません。また、投資に関する最終判断はご自身で行われますよう、お願い申し上げます。加えて、当資料の著作権はファーストメイク・リミテッドに帰属し、いかなる方法によっても、全部もしくは一部を無断で複製・転用・配布・転送することを禁じます。